

計画系建築教育の今後の課題

日 時: 2003年3月17日(月) 13:00 ~ 17:10

会 場: 大阪科学技術センター 7階701号室

参加人数 46名

司 会: 岡崎甚幸 (京都大学)

副司会: 服部岑生 (千葉大学、本特別研究委員会委員長 / 建築計画委員会委員長)

講 師: 小島 孜 (近畿大学 / 建築設計)
本多友常 (和歌山大学 / 建築設計)
倉田直道 (工学院大学 / 都市計画)
足立裕司 (神戸大学 / 建築歴史・意匠)

コメンタ: 長澤 泰 (東京大学 / 建築計画)
重村 力 (神戸大学 / 農村計画)
竹下輝和 (九州大学 / 建築計画)

記 録: 吉村英祐 (大阪大学)

研究討論会開催の趣旨文

内外で建築教育に関する関心が高まり、私も建築学関係の教育関係者の社会と学生に対する責任は、ますます重要な意味を持つようになってきました。本年度には、JABEE に関する教育改革、日本建築学会による建築設計教育に関する緊急提言など、大きな変化の兆しが見え始めています。

こうした状況を踏まえて、日本建築学会では2002年度から建築計画委員会、都市計画委員会、農村計画委員会の三委員会が合同で、21世紀計画系建築教育特別研究委員会を発足いたしました。このたび、今年度の活動の締めくくりとしまして、特別研究委員会の検討課題を各方面から伺うために、上記研究討論会を開催することになりました。研究討論会では、大学で計画系建築教育に携わられている下記の方々から、「計画系建築教育の今後の課題」というテーマで各自の現場の実態報告や課題をご披露いただきとともに、相互に討論していただくことを考えております。

年度末のご多忙な折ではございますが、計画系建築教育に携わられている多数の皆様にもご出席を賜りますよう、お願い申し上げます。

研究討論会の発言概要

■ 服部岑生

今回の研究討論会は、計画系建築教育をいろいろな角度から考える会である。去年の大会研究協議会では設計教育の刷新、リアリティを持って教育の現場で学生に関わっていかなくてはならないという討議を行ったが、今日はその続きである。計画系(建築計画、都市計画、農村計画、歴史・意匠)がどういう位置づけにあればよいのかを討論するため、本日のパネリストにおいていただいた。

仙田会長名で出ている緊急の「設計教育のありかたに対する提言」(注1)では、設計教育は環境問題などの社会課題が多いにもかかわらず、学生がリアリティを持ってそれに向かうような充実した設計教育が行われていないという認識がある。もっと基本的なこととして、設計教育の成果が充分でなく、教育の質が低下しているのではないかと、それが環境や都市景観の問題は設計教育の質に関係しているのではないかと提言で出ている。その他、教官の体制や施設の水準を改善していかなければならないということも提言のなかで言われている。また同提言では、基礎教育としての設計教育と、専門教育としての設計教育の区別を言っている。本日の議論のなかで、それらの関係が出てくるのではないかと考えている。

JABEEの本審査が来年度から始まる。JABEEの問題のなかで、設計や計画系教育がどのように扱われているかを報告すると、それぞれの教育機関が学習目標を掲げたなかで、基礎的レベルの教育は必要であるが、建築計画、都市計画、歴史・意匠計画系教育の扱いを自由にしていよいことになり、高度な教育をするか否かは各教育機関に任せることになった。あまり水準の低い教育を認定する気はないようであるが、審査を厳しくして 90

ある建築系教育機関のうち 30 しか通らないということになると、おかしいことになる。

来年度の建築学会大会では、「計画系建築教育の質向上と個性化」という研究協議会を予定しているの、今後も協力いただきたい。

【各パネラーの自己紹介】

■小島 孜（近畿大学）

設計と私学の立場から話したい。ヘキサという設計事務所でコーポラティブ・ハウスを設計していた。近畿大学に来て、間もなく 9 年になる。

■本多友常（和歌山大学）

民間から大学に移った。学生がどうやって物事に興味を持ていくか。設計をやり始めると、非常に優秀な学生が何もできなくなることが、最後まで建築教育の入り口のところで山があり壁となっているが、そこを何とかブレイクスルー（breakthrough）したい。試行錯誤の段階ではあるが、今やっていることを説明したい。

■倉田直道（工学院大学）

建築都市デザイン学科で建築教育と都市デザインの教育をどう融合していくかを今、試行錯誤している。建築教育において社会性を求めていくと、その接点に都市がある。単純に建築だけを考えていく時代ではない。

■足立裕司（神戸大学）

民間にいた経験も踏まえて話をしたい。「歴史」という言い方と「歴史・意匠」という言い方は違うことを述べたい。

【発言趣旨概要】

■小島 孜

近畿大学の建築学科は学生定員が 162 人、実質 200 名前後で、学生が非常に多い。建築システムコースと建築デザインコースの二つのコースがあり、2 年生からコースに分かれるのだが、当初のアンケートでは約 80% がデザインコース志望であった。しかしその後の講義などを通して社会の現実を教えた結果、2 年の終わりの段階では、デザインコース志望者は 40% と半減している。今までの例では、卒業設計をする学生は約 30% で、設計分野に就職する卒業生は 15~20% と、さらに減少している。設計・デザインに興味を持って入学してきた学生を、4 年間の教育を通して、他の建築分野へ志望変更させ卒業させているのが現状である。

一昨年、トップダウン型で学部の改組が行われ、学科の統合が進められた。当時学科長であったが、建築と土木の統合を建築が断った経緯がある。そこで主張したのは、「人との関連で構築物を扱うのが建築であるが、人が関わることで、あいまいな部分や多面的な価値が入ってくる。そうすると批評性を保証することが不可欠となり、批評の場としての分野が極めて重要となる。建築分野という批評の場が確立しているにも拘わらず、建築の名を外すことは大きなマイナスである」ということであった。そのかわり、建築と土木の学際的な領域である環境分野は土木に譲り、土木は社会環境学科と名称を変えた。

来年度、JABEE の認定を受ける予定である。システムコースは「包括・総合」で、デザインコースは「設計・計画」で、プログラム認定を受けようとしている。専門科目は 75 科目あるが、必修が 3 科目（情報処理基礎、総合セミナー、卒業研究・卒業設計）しかないのが特徴である。その他の科目を 7 グループ（構造系、計画系、環境系、演習系など）に分けて選択必修とし、グループ内でそれぞれ最低取るべき単位数を決めている。グループごとの必要単位数を変えることでコースの特色を出すことに加えて、学生一人一人が自分の興味や将来を考えて受講科目を考えていくことと、基本となる科目を全体的に学ぶことの両立をはかっている。

JABEE では学習教育目標を立てなければならない。そのマトリックスが 6 ページ目（注 2）に出ている。JABEE が定めている横軸の項目は、「設計・計画」、「構造」、「生産」、「環境・設備」となっているが、近畿大学では、もう一つ「都市・住宅・歴史」を立てて、計画系ががんばった形の 5 本柱を立てている。

設計教育における JABEE 対応としては、UIA 対応もにらんで、学生と教員のコンタクトタイムをはっきりさせるため、エスキースを見た時間と内容を記録にとどめるカルテを作成しており、かなりの成果を上げている。

もう一つの試みは 3、4 年生の設計演習で、複数の課題から、学生が指導教員と課題を選べるようにしたことである。そこでは、木造の課題、住居系と複合系のプロポーザル課題、まちづくり課題、保存・修景の課題、一級建築士の受験課題、コンペコースなどを用意している。

最後に、設計、計画、建築史、建築論の計画系

諸分野の創造的な関係を築き、問題解決に向けての有効な手法たらしめるための「方法論モデル」について述べたい。資料に学会計画系論文集に掲載された論文(注3)を示しているが、その12ページにある「方法論モデル」がそれである。底面の存在の平面と上面の認識の平面を、観察帰納法、仮説演繹法、意味解釈法の三つの方法論が接続する形の三角錐モデルであるが、認識平面の三辺は、個別と一般、特殊と普遍、具体と抽象という三つの対概念に対応している。ここで、三角錐の側面を構成する、上向き→横スライド→下向きの動きが、計画系各分野での典型的な思考回路に対応している。ここで言いたいことは、それぞれの分野がこの典型的思考回路に止まっていたら、創造的な関係は取り結べないということ、そして、個別化、一般化、特殊化、普遍化、具体化、抽象化という、認識平面上の横スライドを自在に行い、最終的に存在平面に再接続することの重要性である。こうすることで、分野を超えた知的交換が可能になり、学問が問題解決に積極的にかわり、リアリティーを回復できるのではないだろうか。

■本多友常

和歌山大学のシステム工学部は、建築・土木・造園を一体化して環境系の教育をしようとするものである。一級建築士などの資格がとれることが学生にとって魅力になっているが、いろんな問題を抱えている。定員60名、実質60数名の学生が三分野に分かれていくが、建築計画はさらに半分くらいになる。生物や緑環境の演習のなかに設計製図が組み込まれているが、違う分野をやろうとしている学生にとっては、設計製図はストレスでしかない。まずは線をきちんとかく、あるいはきちんと相手に伝わるプレゼンテーションをする。すなわち、トップを持ち上げるのではなく、ボトムをベースとしてきちんと考えていこう。単体のものをつくってもしょうがない。もっとまわりのことを考えていこう。大きく分けると、人間が関わっていく計画系の問題である環境計画と、自然環境の二つに分かれる。紀伊半島は自然に恵まれているなかで、物事をトータルに考えていこうということがある。

設計教育については、住環境計画としてのオーソドックスな調査・分析をし、あるべき姿はどうであるか、そこから設計はどういう提案をするべきかを、私と足立(啓)先生と神吉(紀世子)先生と一緒にしている。特に、高齢社会を迎えた時

代の建築計画のありかたの一環として、たとえば和歌山県南部(みなべ)町における福祉システムはどうあるべきかを、外部との対話のなかでやっていこうとしている。厳しい条件のなかで、小さなグループホームの建設を大学として具体的に設計の提案をしていく。学生に強制はしないが、興味がある人はどんどん入ってもらおう。ただし、対社会的に責任を伴う。いちばん重要なことは、学生たちが、自分たちがやっていることをイメージできることである。

学生は3年生の夏休み前に配属を決める。本多研究室は最大定員が9名であるが、足立研究室とコラボレート(collaborate)できるので2倍になる。まず、夏休みに大きな模型を作らせる。1~2週間の短期に、全員がオープンデスクで設計事務所にご奉公に行き、トイレ掃除からさせる。

学生は課題を与えるとよく勉強できるが、いちばん問題なのは、自分で提案したりテーマを見つけたたりすることができない、実感が持てない、おもしろいと思えないことである。「いちばん真剣になるのは、遊ぶときだね」というのが合い言葉である。建築の設計が遊びであると思えばいいねというところから入っていく。

私のところでは、設計図を描く前に最初に、30秒くらいで「最高の犬小屋のデザイン」を設計させる。70~80%は典型的ななかでデザインするが、実は小川が流れていて、蔭があって、崖に穴が掘ってあるという、環境としてトータルとして考えていけば設計がうまいも何もない。もっと物の発想を考えていこう。

今までの方法と違う建築の教科書をつくった。全く手が動かない学生に体で覚えさせる、ゲーム感覚で話ができないかということをしてようとしているアイデア集のようなものである。体で覚えさせるため、学生に実測調査をさせたり、信州でシェルターを作らせたりしている。

高野口(こうやぐち)小学校の取り壊しが決まり、コンペが行われたが、そこに文句を言っている。建築学会からも保存の申し入れをしている。学生とともに戦略を立てて、昔のものを完全に変えなくてもいいではないかという提案をしている。また、紀伊半島の大島の集落調査の一環として、大島灯台にある日本最古の石造りの建物(榎野崎灯台吏員退息所、リチャード・ヘンリー・ブラントン設計)を学生のフィールドとして与え、実測調査をさせている。世のなかとぶつかりながら学生といっしょ

に失敗し、体を動かしている。図面を描くのが設計ではない。問題が起こったら必ず提案していこう。

設計の立場から、ゼミ活動をどう運営しているかを披露した。新建築の2003年1月号に本多ゼミが紹介されているので、コピー（注4）を後ほど配布させていただく。

■倉田直道

私が所属している工学院大学には、建築都市デザイン学科がある。4年前に新たに発足した。それまでは建築学科のなかに都市デザインコースという形でやっていたものを独立させた。建築学科の定員は120名、建築都市デザイン学科が60名、2部の建築学科が60名、全部で240名であるが、実際は都市デザインコースに80名くらいいる。全体のカリキュラムのなかでは伝統的な構造の科目は減らせないなかで、建築を都市とのつながりのなかで考えていく必要があるという社会的要請から、学科を独立させた。都市系科目が圧倒的に多く、専任11名のうち4人が都市計画と都市デザインの担当、建築計画・建築デザイン関係が3名、構造系が2名、その他が2名である。

建築系と比べると、1年生の専門科目には景観デザイン概論があり、2年生になると都市基本計画や市街地整備計画という科目がある。3年生になると、設計製図が建築都市デザインという名称の設計になり、建築設計という演習がなくなる。都市デザイン史、都市解析、都市交通計画、ランドスケープデザイン、建築都市保存調査演習など、都市に関連したものが、かなりウェイトを占めるようになってきている。特にそのなかで、建築教育と都市計画教育をいかに融合して進めるかを心がけている。アメリカでは、わが国と比べると都市計画はどちらかというと社会科学系の位置づけになっていて、デザインや設計という概念はほとんどないに等しく、かなり専門が分化した状態でのプロフェッショナル教育である。わが国の特殊性として、建築のなかで都市計画・都市デザインをきちんとやっていくことの意味が非常にあると考えており、建築都市デザイン学科の意義もあるのではないかと。

建築がより社会的意味を持つようになっていくと、都市や地域との接点が非常に大事になってくる。そうしたときに、スタジオ教育が核にあることは非常に大事ではないかと感じる。フィールドは最大の教科書である。さまざまな建築をとりま

く環境を理解するうえでも、フィールドを通してながめていくことは意味がある。

もう一つは、最近の学生は人とのコミュニケーションや、協働して何かをすることに慣れていない。スタジオのなかにおいても協働やコミュニケーションをどれだけ大事にしていけるかということがある。また、自らが発見することの意味、さらに発見を通してリアリティを獲得していくことも非常に大事である。だんだん学生の作業にリアリティが希薄になってきている。社会における建築のありようについてのリアリティが希薄である。同時に、社会に開かれた教育が必要である。自分たちがしていることが社会にどう受け止められるかを常に確認できることも大事である。学生がやった課題を外部の先生に率直に評価してもらうこと、学生が外に出て行って発表する機会、外の人間と協働する機会が大事である。また、自分たちのやっていることをより国際的に理解する機会も大事である。

もう一つは、プロフェッショナル教育である。私学の場合は、就職が非常に厳しい状況が現実である。これまでは、学校は教育であり、あと必要なものは社会に出たら、そこで再教育してもらうことが可能であったが、そういう余裕はなくなっており、よりプロフェッショナルな人材を社会が求めているのが現実である。専門学科を出れば社会に就職が準備されている時代ではないと思っている。アメリカでは、プロフェッショナル教育は大学院レベルで行われている。都市計画には学部がなく、大学院からが一般的なもので、いろんな分野の人が入ってくる可能性がある。

また、大学院教育、一度社会に出た人間がもう一度大学に戻る機会としての大学院教育を、何らかの形で準備しなくてはならない。また、二部のなかで、仕事をしながら来ている学生が、普通に進学してきた学生のなかに入ることは刺激があり、非常に意味がある。

最後に、建築都市デザイン学科の象徴的な科目である、3年後期にある建築都市デザインについて少し紹介したい。かなり盛りだくさんなことを学生に期待している。週に3時間ずつ2回、計6時間あり、前半は地域の分析をしたうえで、短期課題をはさみ、後半はスタジオワークで設計そのものの提案となる。ここでは80人の学生を20人ずつ、四つの小さなスタジオに分ける。それぞれのスタジオを専任4人がそれぞれを持ち、なお

かつそれぞれに非常勤がつく。各スタジオは、同じ地区を対象としながらも少し違うテーマ設定をし、学生がそれを選ぶという進め方をしている。第1ステージでは学生たちが町へ出ていき、あとで学生たちはワークショップ形式で議論する。学生たちは、共同で作業をしたり議論したりすることはそれほど得意でないなかで、ワークショップは非常に有効である。最初は学生たちに戸惑いがあるが、やがて自然に議論できるようになる。さらに、グループでまとめる作業をし、地区を評価したり課題を評価したりし、それに対して町の可能性や将来像を含めて考えることをしている。この段階では必ずしも建築の話にはいかず、公共空間のありかたに眼がいく。

短期課題をはさんで後期になると、グループに分かれる。私のスタジオでは「町並みをデザインする」をテーマにしている。まず、20名くらいの学生で現況模型を作り、いろいろ分析したものをベースに、町づくりの共通ルール（高さ、眺望の抜き方、低層部のつくりかたなど）をいろいろ決めたうえで敷地が重ならないように選び、一人一人の設計課題として行う。最後に、提案したものを大きな模型にはめ込んだときに、どういう町並みができたか、学生が考えていた町の将来像とルールが適切であったかを検証することを試みている。

さらに個人的には、海外の大学とジョイントスタジオを行ったり、国際的な学生が集まるワークショップに参加させたりしている（注5）。ジョイントスタジオがおもしろいのは、日本、あるいは大学のなかだけにいるだけでは、いかに自分たちの身の回りや自分のことをよく理解していないかということがわかることであり、特にコミュニケーションという問題では大事である。一緒に議論したり作業したりすることの意味、文化を越えていろんなことができる可能性を発見することを経験する。これをカリフォルニア大学バークレー校やアジアで行っている。大学を外に開いていく、あるいは学生を外に連れ出すことの意味は非常にあと、試行錯誤を通して強く感じている。ヨーロッパやアジアの学生は、このような活動が大学に戻ると単位として認められるが、残念ながら、日本ではこのような活動を大学の単位として認めることが難しいのが現状である。

このように、試行錯誤の段階ではあるが、建築と都市の融合は大学での教育をより社会とのつな

がりを持つことにもなるのではないかと感じている。

■足立裕司

私は、ほんの短い間ではあるが一度実務に出た。もともと設計に興味があった。（向井）研究室に毛綱毅曠がいて、「設計ができない研究者なんてだめだ」と言っていた。設計と研究は両輪のようなものだからで両方できないといけないと思ってきた。大学に戻ってから、向井正也先生がやられていた西洋建築史、近代建築史の科目を受け持ち、いつも建築史を一般の建築教育にどう生かしたらいいのか、どう位置づけようかと悩んできていた。

最近、神戸大学史のなかの工学部全史（発足から戦後新制に移るまで）を書き下ろしたことで、今の大学が少し見えてきた。日本の建築史教育の発展は、西洋から輸入した建築教育体系があり、建築のデザインをするためには歴史が必要であり、歴史・意匠という枠組みができていた。かつては皆、歴史研究者であったのは当たり前であり、ある時点までは設計と歴史は常にペアで進んできたが、歴史・意匠という枠組みが通用したのは戦前までであり、戦後はモダニズムの影響下で歴史様式が徹底的に否定された。そのなかで建築計画、計画学が非常に大きな意味を持つようになったのではないかと、建築史は設計行為から離れて基礎学、基礎教養として位置づけられるようになったのではないかと思う。

このような歴史的プロセスを踏まえて、今、建築史教育は建築教育にどういう意味を持っているのかを考えなければならない。私自身は、基礎教養としての位置づけを重視しているが、これがなかなかむずかしい問題である。モダニズムは建築の工学としての側面を重視してきたが、誰もコルビュジェ（Le Corbusier）やミース（Mies van der Rohe）をエンジニアとは呼ばず、皆アーキテクトと思っている。しかし、日本の近代化の過程でとってきた技術重視の教育にモダニズムの思潮が重なった結果、テクニカルなものに偏重し、逆にアーキテクトとしての素養や職能が何であるかを教えることができるのは建築史くらいになっている。現在の日本の建築教育には大きな矛盾を感じている。

私の専門である「建築史・建築論」という意味は、日本の建築学の発達の中で、「歴史・意匠」という言い方とほぼ対応している。形式分析や機能分析だけではなく、それがあつた時代のなかでど

う変遷してきたが、建築史の講座が持っている大きな役割の一つだと、学生に言っている。

結論的なことを言うと、歴史を言うときには、単に形態の流れだけでなく、時代背景を理解してほしい。何をめざし、何を実現したのか、それまでの歴史のなかにあるのかないのか、似たものがあるのかを含めて考えてほしい。それが新しいものは何か、創造とは何かを考えるときの深い理解につながっていく。その場合、建築家の誤読の可能性を奪う気はない。どんどんミスリーディング（misreading）をやってもらっていい。ただし建築制作にとって役に立つミスリーディングと建築史は自ずと異なる。そのどこが異なるのか、学部教育では無理でも、ゼミレベルの活動でやりあっている。それが学生の参考になる。なぜそういうことを言うかという、あまり実証の厳密性を要求すると、自由な想像力を奪ってしまうところがあるからである。

これから建築史はどういう教育を担い、人材を育成すればよいのかというと、まず建築設計の素養としての位置づけがある。アーキテクトを目指すのであればロマネスクとゴシックの違いがわかる程度の見識は持ってほしい。これは西洋の建築家とつきあうときにたぶん必要であろう。言ってみれば眼が肥えてくるということ、今自分がどこにいるのかを知る素養としての役割は果たしうる。

また、研究としてやっていく場合、歴史と設計を組み合わせた保存・修復という分野がある。海外の大学には、ヒストリーを考えている人と保存を考えている人がいるということを考えると、これからは保存学、保存・修復をプロフェッショナルな分野として確立していかなければならない。これは歴史的に一級のものだけを残せといっているのではない。裾野にある建築、歴史的環境にどう関与していけばよいのかを含めてする必要があらう。

もう一つは、これは自明のことであるが、歴史家としての分野がある。かつての法隆寺論争のように、歴史家と建築史家が論争し切磋琢磨できるような人文科学の一端を担うべきであろう。

【コメンテータ発言要旨】

■長澤 泰

私がここに来たメインの理由は、海外教育小委員会の主査となったからである。海外諸国における建築計画系教育の実態を、文献資料の収集や、

海外で教育を受けた、あるいは教育経験がある日本人、海外での教育や研究の経験がある先生方などの経験談や実態のヒアリングを小委員会でやってみてはどうか。同時に、海外の各大学の情報をメールで対話型のアンケートをして情報を集めることで、日本の建築教育の位置づけを国際的な視野からまとめてみたいと考えている。

もう一つ、われわれはこの協議会を教師としての立場でやっているが、学生の立場もあるのではないか。たまたま長澤・西出研のM2がUniversity of South California（USC）に行っていたので、帰ってきたときに、「今、こういうことをやっているが、君の状況を伝えてくれ」と言うと、たいへん長いレポートと三つの大学のカリキュラムを書いたプロシユアー（brochure）を送ってくれた。日本で教育を受けた彼は、日本の教育について、「アメリカの建築教育では、日本のように計画学と設計デザインというように分かれてはいないようです。日本のように授業は授業、調査は調査、設計は設計というふうに分かれてはいません。」と、痛いことが書いてある。学生が向こうで体験したこと、体験して帰ってきた方を各大学から紹介していただき、彼らが日本との対比でどう考えたかを知ることがたいへん重要ではないか。

今後、この研究会全体がどんなふうに行けばよいのか。3年間続けるにはどうしたらいいか。私のプロポーザルであるが、計画系の研究に取り組むためのマトリックスがあったほうがいいのではないか。固くなるかもしれないが、我々が知っているツールはほとんどある。たとえば、左側には教育体系、国内教育、海外教育、職能・資格の問題等の検討グループが一応できている。それぞれの小項目は今後検討していかななくてはならない。右側には、「古い、伝統的だ」といわれるかもしれないが、すでに学会の委員会としていんなものができている。今のところ、研究の分野を主体に教育が行われているのが現状ではないか。そこをクロスしてみて、情報量、重要度、達成度などのチェック用としてつくっている。たとえば、アメリカではそれぞれの分野ごとにどのくらい実際にやられているのかを描いてみると、凸凹ができてくる。こういうものを各先生方に考えていただき、全部合わせると結構升目が埋まっていくのではないか。ただし、ほんとうに必要なものといらないものがあるので、升目を全部埋める必要はないが、どれをディスカッションしているのか、何のため

に情報を得ようとしているのかをまとめるのにはいいのではないか。最終的には、学生がどんな建築人になってほしいかをディスカッションしないといけないと考えている。

最後に、歴史研究者の五十嵐太郎氏が「ビルディングタイプの解剖学」(注6)でいろんなことが書かれている。これは、ある意味ですでに、計画の分野に踏み込んできたという感じである。私も歴史のことを授業でずいぶん話すので、歴史と手をとっていきたい。

■重村 力

個々の研究分野が、どう計画系教育に貢献するのか。都市計画はわかりやすいが、農村計画は農村計画制度というものがない。世界やアジアをにらんだときは、農村計画は非常に重要であるが、どう計画のなかで位置づけていくのかという課題を一つ持っている。もう一つは、昨年の大会(注7)で、私が中国、アメリカ、ヨーロッパの大学で教えた経験などをふまえて、建築学は設計科学であって、認識科学とはどこが違うか、フィールドを重視してスタジオ教育をこれからやっていかなくてはならないこと、一級建築士制度は虚構で、それが建築教育のなかにも入り込んでいるのではないかということ話をした。

もう一度確認すると、私たちが何かを設計しなければならぬときに、建築設計という学問が日本に登場したときに、計画系諸分野が未分化だった時代の原点を忘れてはいけない。学生はフィールドワークを通じて問題を発見するというモチベーションを持ち、かつ解決方法をさぐっていく方法のスタジオ教育を、もっと充実するべきではないか。国際教育に堪えるような、つまり非常に具体的なものこそ普遍的だと考えれば、そういう設計教育をもう少し充実していきたい。そうすると、個々の分野は、スタジオ教育のなかで一生懸命やっている学生たちにとって、非常に重要な知的リソース(resource)となっていく。現代は非常に多くの解明すべき問題があるので、大学院と学部を通してそれらをどこかで準備しておき、それを聴きに行ける形態がとれないかということが一つ。それから、各大学に聴きに行けるような大学間の連携。あるいは、JIAが準備している教育プログラムと大学がどう協力するのか、学生のインターンシップ(internship)をどう組み込んでいけるのか、という問題について、設計教育小委員会で考えていこうと思っている。

■竹下輝和

九州大学は大学改革で、大学院工学研究科から建築学専攻を抜き、教育学部、文学部人間科学科、健康科学センターの4部局を合体して人間環境学研究院・学府をつくった。教育体系小委員会は何をするのか、今日話を聞いて少し解けた部分がいくつかある。

一つは、いろいろある計画系の科目をどうするのかだが、大学ごとにそれぞれ特徴があってもよいのではないか。文部省の指導で取得単位数を124単位(実際は135単位程度)まで落としたが、JABEE対応では少なくとも150単位を超えなければいけないので、今度は逆に増やさなければならぬが、何を増やすのかで個性が出るのではないか。講義と演習は分断されているが、もともとはからんでいるものである。制度的に講義と演習の一体化をどうはかるか。問題解決型思考方法教育をやらなければいけないのではないか。半期15コマ、講義と演習が別々というのが間違いではないかということで、2週間ピッチでどんどん授業を変えていくクォーター(quarter)制度で講義をする。本多先生のやられているプロジェクト型の学習形態を今の制度のなかに入れようと思えば、相当そこを変えないといけないのではないか。これも教育体系の一つか。そこをフォローアップしたい。去年、服部先生の研究室でやられた全国のアンケート調査(注8)で、かなり実態はとらえられているが、倉田先生のスタジオ教育のような、もう少し突っ込んだやり方をボーリング(boring)して、制度上のネックなどについていろいろペーパーをつくってみてはどうかと思ったのが二点目である。

三点目は、理論とスキル(skill)の問題であろう。最近はこの大学もスキル教育をどうするか。実用型教育だけが看板で、学生リアリティがないので、リアリティを持たせるためには実用型教育を入れないと売れないということになる。それぞれの計画系分野で、スキル教育に対して筋道を立てられる理論武装をしたものを世のなかで問えるかを、計画系教育のなかで議論しなければならないのではないか。

【討論・質疑応答】

■本多友常

倉田先生への質問です。ワークショップ、スタジオ形式での海外との交流は、基本的には休み期

間しかできないが、どうやっているのか教えていただきたい。

■倉田直道

さきほど紹介した二つの事例は、2～4週間大学を空けるプログラムなので、他の授業との関係で参加したくてもなかなかできない学生もいる。大学院が中心なので、大学内の他の先生の理解をいただいて調整し、休みにうまくひっかけたりして海外に参加する。

■本多友常

単位取得は、それぞれの大学でできるのか。

■倉田直道

ヨーロッパのほうは、ディプロマ(diploma)の証明を出したり、単位取得を認めたりできるプログラムになっているが、日本の場合はそうっていないので、大学の正規のカリキュラムとは別のエクストラ(extra)な活動としてやっているのが現実である。ヨーロッパやアジアの大学は、参加すればだいたい単位認定されているし、大学からそれに対して補助も出ている。日本から参加する場合、参加費と単位認定の二つのハードルがある。

■北原理雄(千葉大学)

ワークショップはだいたい大学院教育であり、学部でやる場合にフィールドを設定すると、土日しかやれない問題を単位の面から解決しなければならない。もう一つは、フィールドを確保することが、今のところ個人的コネクションに頼っている。計画系の学科がすべてフィールドでやろうとして始めたときに、ほんとうにフィールドを確保できるのか。今でも人気のあるフィールドはいくつかの大学がだぶって入ってきて、地元がだんだん疲れてくる。フィールドを個人のコネに頼っていると、たぶん体系として持続しない。竹下先生と本多先生に工夫のされ方や悩みをお聞きたい。

■本多友常

ワークショップを立ち上げたいときに、他に授業があるときに「それを休みなさい」とはいかないのが、いちばんの問題である。和歌山大学には単位制というのがあって、「自主演習」という単位が設けられている。学生が自分のテーマを自分で掲げて、それを先生が指導する。今期はこういうことをやりたいと申請し、やることをきちっとすれば1単位を出すことになっている。さきほどの小屋造りは、やりっぱなしではなく、きちっとプレゼンテーションまですることで募ると、手を挙

げてくる。連休を狙っていくが、集中講義が突然入ってくると全滅する。非常に不安定だが主体ではないので、そのときできる範囲でやっていくことになる。計画が途中で変わってもかまわないという曖昧なメッセージを出して、ようやく成立しているのが実情である。

■重村 力

中国の教育はロシアの影響を受けているので、大元はボザール流である。製図が進んでいなくて締め切りが近いのを心配していたら、主任が見ていて、「来週からシャンパン(上板)だ」といえば、授業を全部やめて3週間くらいやると、普通のところで1カ月やるより進むわけである。そういう組み立て方ができれば、ワークショップも実にかんたんにいく。神戸大学でも、申告制の演習制度を最近つくった。たとえば、夏休みにJIAのオープンデスクに行くことを申告し、期待通りの成果があがったと認めたら単位認定する。

■森田孝夫(京都工芸繊維大学)

京都工芸繊維大学では過去、建築学会設計競技に多数入選しているが、東大、京大、早稲田大が参加していないコンペは客観的評価にならないと言われた。設計教育を何でどう評価したらよいのか、教えていただきたい。

■長澤 泰

東大は1学年65名で、卒業設計、卒業論文とも必修である。5、6年前から卒業設計も必修になった。評価はたいへんむずかしい。安藤忠雄教授がよく設計を見てくれたこともあって、設計に対する学生のモチベーションが高くなった。すべて数字に置き換えることはやってはいけない。講評で先生の評価が割れることもある。

■重村 力

早稲田に入学してから13年在籍し、25年前に神戸大学にきた。早稲田で最後の頃に、吉阪隆正先生が夜間のアフタースクールのような産業技術専修学校(現・早稲田大学芸術学校)をつくられた。吉阪先生に、「とにかく学生をコンペに通してくれ、コンペに通らないとクビである」と命じられ、そこで教えることになった。皆で必死になり、どんどんコンペに通るようになった。神戸大学でも、学生には「チャレンジしてこい、他流試合してこい」と大いに言っている。しかし、本質的なところは絶対、量に置き換えられない。なおかつ、ほんとうの成果は、いい教え子たちが大量に育ち、立派な建築を建てる風景は見られない。だから、

信じる以外にない。信じたものは気迫に現れる。

■足立裕司

私は JABEE に懐疑的である。大学にいる間が勝負なのではなく、社会に入ってからどれだけ自分の能力を磨いていくかということが重要ではないか。そうすると、それはだめだとよく言われる。大学を出るときに、ある程度の水準を身につけなさいというのが JABEE である。それに対して、私が期待しているのはもう少し遅効性のもの、亀のように長い距離で勝つ、勝ってほしいという期待を込めて歴史教育をしている。従来の様式史、思潮史から、形態論として歴史上の建築を設計教育にきちっと入れたのがロバート・ヴェンチュリ (Robert Venturi) ではないかと思う。ポスト・モダニズムとしてみな一蹴してしまうが、そのへんは高く評価している。

大学の評価は、自己評価と言いながら他人の評価である。そうではなく、学生が自分に対して厳しい眼で自己を見つめ、自分を鍛え直すことができるような基礎を大学の間に持ってほしい。私はそんな非常に古い形の理想を持っている。今やっている大学改革は、実は昔の大学教育のなかで完全に実現されていたことであるが、それらは新制大学制度として戦後スタートした教育のなかで忘れ去られていった。

鈴木 (博之) 先生が言われているが、JABEE や UIA にこのまま同調するのは、日本の建築教育を危険な方向に持っていくのではないか。そのへんを肝に銘じて、古いよいものを大事にすべきではないかと改めて言いたい。

■安原盛彦 (秋田県立大学)

建築教育は、新しい建築空間をつくることに集中しすぎてきたのではないか。モダニズムが行き詰まったなかで、どう設計教育をするのか、どういう設計方法論でやっていくのかが行き詰まっている。環境や保存修景が強く浮かび上がってくるのではないか。新しい建物だけに前衛的な感覚を持っていると、古い建物がどんどん壊されてしまう。古いものの空間体験をして、優れたものとして残していく感覚が建築教育のなかで大切ではないか。

■足立裕司

「美・用・強」という、古来の建築に備わるべき要件に加えて、学生にはそれに「環境」を加えて話をする。モダニズムがめざしたものは自律性であるが、それが町並みのなかでは違和感を持つ

場合がある。モダニズムという言葉だけでは解決しない。スケールやプロポーションも町並みとの関係で考えるものであるという話をする。しかし、神戸大学 90 人のうち、どれだけが理解してくれるのか、いつも不安に思っている。フィールドで漆喰や土壁などの素材のよさやおもしろさを学生に見せたいが、なかなかできない。ほんとうに学生が理解するのは、卒業後何年かしてそういう問題に突き当たってからである。じわっと、少しは教育の効果が期待できるのかなという程度である。

■倉田直道

私は、今の話にあまり悲観的ではない。新しいものだけで都市ができていくわけではない。都市をきちっと見て、都市の魅力を発見することを重ねていくと、結果的にそういうものが社会において価値を持っていることに気づくようになるのではないか。

非常におもしろいことに、今年の卒業設計の優秀作の半数以上は、新しい建物の設計・デザインではなく修復である。昨年あたりからそういう傾向が強い。都市の構成要素としているんなものがある。必ずしも文化財的なものだけではなく、価値を持つものが町のなかにあるということが見えてくると、そういうものを手がかりにして新しい問題意識が出て来る。

必ずしも都市計画としてプラクティカル (practical) に現実の問題を処理することだけが求められているわけではない。社会との接点をきちっと持ちながら建築を考えていくことだけでも都市は変わる。今こそ、そういうことがやりやすくなってきている。それを考える環境さえ与えてやれば、学生は思った以上に敏感に反応する。

学内だけで学生の課題の評価することはむずかしい。たとえば、卒業設計を専任だけでなく日常的に実務に携わって現実の社会に触れている非常勤の先生も入れて最終評価をしたことによって、学内だけで議論した場合とずいぶん違う結果になることが、現実には起きている。

■柏木浩一 (アピター級建築士事務所、前・竹中工務店設計部プリンシパル・アーキテクト)

非常勤を 10 年やってきた立場から発言させていただく。建築教育の目的が何なのかがときどきわからなくなる。「建築家教育」と「建築教育」の二つに粗っぽく分けてみる。建築家教育をすると、ずいぶん落ちこぼれが出る。建築家教育をすると

就職がない現実を、心ある先生方は悩んでおられる。また、建築教育で建築的思考を教えれば、どんな分野でもつづしがきくではないかという教育を徹底すれば、ずいぶん救われる人が多くなる。建築家にならなくても習った学問は将来役に立つので、善良的な方法である。ただ、特に建築家を売り物にする某大学は、そういうことを言うと逆に人が集まらないという現状があるようである。

■竹下輝和

精神論では建築家教育をしたいが、日本の大学では無理である。建築家教育にとっていちばん重要なことは、科学性、技術性の問題については建築教育で何とかかなと思うが、思考性と芸術性を各教育機関単独にできるかが非常に疑問である。今、個人的に考えているのは、九州大学は九州芸術工科大学と統合するが、福岡地区全体を集めて建築家教育を一本揚げようか、地区ベースで連携大学ができないだろうか。それだったら何となく芸術性強化という形でできるかなと。そういうブロックが日本のなかでいくつか生まれれば、全員建築家になる必要はないわけで、この競争社会に耐えられる人材を育てられるのではということを考えている。

■小林秀樹（千葉大学）

デザイナー教育とプランナー教育は違うと思う。建築プランナーとしてのスタジオがありうと思うが、どういうものなのかを今、模索している。小島先生のコーポラティブであれば、設計者とコーディネーターという新しい職能が出てきている。建て主の意見がばらばらなので、意見を調整して建築の目標を作るまでが仕事である。こういうのをもっと充実していくこと、プランナー教育も計画系建築教育ではないか。

■小島 孜

私にとって、設計能力を高めることと計画能力を高めることは、どちらも同じ、問題解決能力を高めることだと思う。阪神・淡路大震災後の、芦屋西部地区では、住民と行政が対立するところでのまちづくりを経験した。対立は二極的構造である。建前で事業を推進する行政と、本音で抵抗する住民との対立のなかに、第三者的な立場を築き、三極的な構造にするのは、問題解決のしくみとしてはなかなかいい。そこにプランナーや建築家のポジションがあると思っている。

■大野隆造（東京工業大学）

文脈のある具体的なものが普遍に通じるという

重村先生の意見はその通りであるが、時間の問題がある。中国のやりかたなら可能かもしれないが。具体的な文脈を持った場所に連れて行って、いろんなサジェスション（suggestion）をされながら普遍化に導いていけるか。その過程で、きれいに体系化された方法と別の方法で教えることが可能なのか。時間や、建築家教育のグループには他の講義を減らしても有効なのか。どういう方策で、非常に魅力的なことが実際に継続的に可能なのか、竹下先生のアイデアを聞かせてほしい。

■竹下輝和

去年から、大学のフィックスされた時間割も、大学の裁量権で変えられるようになった。小学校の進んでいるところは、学習指導要綱に基づく目標さえ達成できれば、校長の裁量権で2週間ピッチでカリキュラム内容を変えられる。だから大学もやれると思う。問題は、工学部に属していることであるが、評価の問題からは逃げられない。われわれは、今の時流に合わせて評価方式を開発しなければならない。そのときに相手が協力してくれるかが問題である。部局ごとに評価が何でもスタンダード化されるからよくない。

■伊藤 毅（東京大学）

今日の話は大きく分けて、教育の問題と研究の問題がある。今日は、主に教育の話の事例が紹介された。一方で、研究の側面から見たときに、皆さんがどう考えておられるのかがよくわからない。今、建築学のパラダイム（paradigm）が大きく変わらざるをえない時期に来ている。研究というフィールドは、今まで構造・環境・計画という三本柱を自明なものとしながら、さらに計画は自明に成り立つのかということも踏まえて、今まで何度か議論されてきたが、それをもう一度上位のレベルで議論すべき時期に来ている。今日の研究討論会は教育にかなり重点があるが、皆さんはどういうところに研究のフィロソフィー（philosophy）を持って進めていこうとされているのかは、いちばん本質的なものだろう。その点を小島先生にお伺いしたい。

■小島 孜

計画学にフィロソフィーをとということを言いたい。設計の立場で計画を見ていると、フィールドに立って調べ上げていく、観察帰納法的手法だけでは少しまどろっこしい感じがする。継続している対象ならそれでいいが、大きく変化する対象にはついていけないし、変化を促す研究が生まれに

くい。その一方で、設計の方法は独善的という欠陥を持っている。それをうまくクロスさせて、設計に観察帰納法を取り入れ、より正確で厳密なものにする努力と同時に、計画の分野でも、もう少し仮説演繹的な、ある種のフィロソフィーを前面に出して、理論構成することが必要ではないかと思う。

■西出和彦（東京大学）

長澤先生の OHP に、どのような建築人になってほしいのかということが書いてあったが、その前に、どのような環境がよいものとして、そのためにどのような人が何をなすべきかを付け加えて、委員会として提言していくべきではないか。

今日は、フィールドワークの話が感動的であった。形ではなく、人間と環境の共存のひとつの形ではないか。これからの建築のありかたを考えると、多様性を含んだ今後のあるべき姿を提言することがこの会の役目ではないか。服部先生にお聞きしたい。

■服部孝生

この研究会では研究論があまり語られなかったというご意見が出たが、研究が今ディスカッションしていることに関係していることは、その通りである。小島先生が、計画学の研究は実証的でスタティック（static）な現象だけを扱っているというようなことを言われた。そういう話を前提にすると、伊藤先生や西出先生が言われたことは非常に夢深いものがある。新しい研究の成果、あるいは方法論を含めて出していかなないと、教育体制がいくらワークショップやフィールドと言っている、研究がいっさい変わっていかないということは、非常におかしいと思う。どういう研究の方向性を持っていったらいいかということに答えはないので、もう少し待ってほしい。

ただ、答えのイントロらしきことはいくつか考えられる。一つめは、絶望的な状況だとは思っているが、われわれがある理念を持った立場に立たざるをえないので、それをつくりだし、あるいは確認しなければならない。二つめは、設計学的歴史論、歴史学的設計論、あるいは建築計画的設計論、都市計画的設計論、設計論的都市計画論とか、二つの用語を組み合わせると、今の時代に何か意味があるように感じる。それは、“double discipline”という感じである。それぞれの方は、そういう感じになってきており、その方が社会的に非常に感銘を与えるし、われわれにシン

ボリックになってきている時代だと思う。われわれ計画系分野は、“double discipline”を手がかりに変革していくのではないかという気が今、すごくしている。たとえば歴史学一本などという人は、将来いなくなってしまうのではないか。

■杉山茂一（大阪市立大学）

JABEE は、計画系については 5 年教育という話が今もある。大学院進学率は、国公立で半数を超えるが、学生は設計だけでなく、ゼネコンやハウスメーカーにも就職するなかで、どのように、どのへんまでやるのかを重村先生に、またどういう建築人になってほしいのかを長澤先生に伺いたい。

■重村 力

日本の建築教育は、かすかに世界一流の建築家をずっと出してきたが、一流半・二流から下は、がくっと落ちる。一方で、日本では住宅、病院、学校などを充実しなければいけなくて、そのために大学院の研究を軸に計画学という分野をつくられた。ただ、そういう研究が二流・三流的に受け止められて、ステレオタイプの団地、病院、学校が、建築教育を受けた役人や設計事務所、ゼネコンによってつくられてきた。私は非常に楽天的で、そういうものがだんだん良くなってきていると思うが、それは大学院教育が充実してきたからだと思う。それでもまだ、大学院が分かれているのが問題であるが、6 年間続けてやれば、ヨーロッパやアメリカに負けない教育になるのではないか。

■長澤 泰

有名な建築家ですら、データが手に入り、それを少しはかみこなせるようになったのではないかと。歴史は変わった。昔の計画とは少し違うが、計画のいい時代になった。これからは、よく言われるように、どうやってつくるのではなく、何をつくるかである。さきほどのアメリカの大学院のレポートからみると、修士に行く人は、完全に建築家になる資格を取るために、1 年半または 2 年半がらばる。これは、アーキテクトを社会がしっかりつくろうという制度になっているが、日本も JABEE だけではなく、そうなっていくだろうと思う。

さきほど、建築「家」でなく建築「人」になってほしいと言ったのは、建築「人」はもう少し広くて、建築「家」だけをターゲットにしてはいけな時代になっていると思うからである。

■増井正哉（奈良女子大学）

パネラーの先生は大規模な大学が多いので、目指す方向はCOE (Center of Excellence) を取るなど、研究主体の大学であるなかで考えておられる気がする。一方、私どもの小さな地方大学では地域貢献が迫られており、大学全体の方針に建築教育を合わせていかなければならない。ワークショップ形式はずいぶん示唆的であるが、地域をフィールドにしておくだけでいいのかのこのところがある。奈良の町を使って設計演習を行っているが、町の人から見れば踏み荒らされて、いろんな提案をしてくれるが、大学の先生と学生は無責任で終わってしまう経験も多い。そのときに、大学の教育とまちづくり・地域づくり、自治体を含んだ政策化まで住環境・建築教育を持っていく必要があると個人的に感じている。

■本多友常

授業としては、たとえば住宅にしても、現実の敷地を見に行かせてから提案をさせている。あと、建築をつくればいいのではなく、ひょっとして何もつくらないほうがいいのかというものも含めて、まわりがどうなっていたのか、それについてどういうやりかたをしたのかを、しつこく問うていくことが基本的になっている。古いから残すのでもなく、また取り壊すわけでもない。カッコいいというのは個人の趣味であり、それよりもまわりのことを地域とどう考え、どういう関係性を持っていくかが基本的なポイントである。建物を設計するわけではないが、いろいろな形で学生たちの活動が住民のなかに地域貢献という形で入っていき、それを新聞社が取り上げてくれる。

最後に、やはり建築ですから、一方でスキルを大切にしなければならない。スキルに対しては、別個の修行のしかたをしている。何か外に出て行けば、知らないうちに、意図的ではあるが、何らかの役に立っているという確信はあり、かなり手応えがあると考えている。

■岡崎甚幸

長い間、熱心な討論をいただいてありがとうございました。これは今後とも続きますので、今日の問題を引き続いて討議したいと思います。ありがとうございました。

(文責：吉村英祐)

注

- 1) 設計教育のあり方についての提言、2003年3月12日、社団法人日本建築学会 設計教育特別調査委員会(委員長・香山壽夫)
- 2) 配布資料 1-(1) p.6、「表 2 学習教育目標と基準 1 の(1)の(a)～(h)との対応」。
- 3) 配付資料 1-(2)。
- 4) 配布資料 2-(2)。
- 5) 倉田直道: アジア国際都市デザイン・ワークショップ、新建築 2003 年 4 月号、p.40
- 6) 五十嵐太郎、大川信行: ビルディングタイプの解剖学、王国社、2003 年
- 7) 2002 年度日本建築学会大会(北陸)研究協議会 これからの計画系教育はどうあるべきか - 計画系教育の変革のビジョン -、日本建築学会 建築計画委員会・都市計画委員会・農村計画委員会、2002 年 8 月
- 8) 千葉大学服部研究室: 日本の計画系教育の状況 - アンケート分析 -、注 7 資料 pp.56-70 に掲載。

配布資料

1. 小島 孜

- (1) 建築学 JABEE をめざすプログラム案(1.9 案)(配布資料 pp.1-6)
- (2) 小島 孜: 創造的合意形成に向けての方法論的考察 芦屋西部地区復興まちづくりの中間総括、日本建築学会 計画系論文集 第 524 号、pp.327-332、1999 年 10 月(配布資料 pp.7-12)

2. 本多友常

- (1) 和歌山大学システム工学部環境システム工学科の教育システム(A4 1 枚)
- (2) 連載 研究室レポート CASE 18 本多友常ゼミ/和歌山大学システム工学部環境システム学科 教えることよりむしろ共に考えること、新建築 2003 年 1 月号、pp.202-203

研究討論会のようす



服部委員長の挨拶



左から 服部孝生(副司会) 岡崎甚幸(司会) 重村 力
(コメンテータ) 長澤 泰(同) 竹下輝和(同) 小島 孜
(講師) 本多友常(同) 倉田直道(同) 足立裕司(同)
の各氏



会場風景(講師講演時)



会場風景(討論・質疑応答時)